

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K02	氏名	相川 猛
研究主題 —副主題—	「自律した学びができる子供」を育むための方法論的考察 —小学校社会科における筋道—		
所属校	世田谷区立烏山北小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>子供にとって良い社会科の授業をするためには、教員がどのような力量をつければよいのだろうか。これまでは、発問の質を高めることや活動場面の設定などの指導の工夫が授業内容を高めることができる力量だと思ってきた。</p> <p>また、子供に身に付けたい資質については、「社会的な事象を見る視点」をもたせたり、「社会参画への意識を向上」させたりすることだと考えてきた。</p> <p>それらに対し、奈良女子大学附属小学校（以下、奈良女附属小）の主事（校長）であった重松は「授業は、教師と子供との心の行き通いをめざすべきものである」とし、「授業において（略）生き方に問いをなげかけるもの」と述べている。さらに、重松は、「本音が十分にあらわれ個性的思考を動かし吟味し、想像活動が活発な授業であったり、しみじみとしたものがあらわれるものであったり」と主張している。重松のこのような授業観は、私のこれまでの実践や思考を考え直すきっかけとなった。</p> <p>そこで、教員と子供との関わりを考察するとともに、小学校の社会科教育における授業の筋道を見いだすことで、自律した学びができる子供を育むための方法を探っていく。</p>
II 研究の方法	<p>今回の研究における方法は、以下の二つである。</p> <p>1 文献研究 重松鷹泰・高久清吉・藤井千春の文献を基にしながら、教員と子供との関わりについて考察する。</p> <p>2 逐語記録による分析 奈良女附属小にて実地研修で訪問した際の、映像記録を逐語形式で文字に表し、その内容から考察をする。</p>
III 研究の結果	<p>研究の方法から導き出した結果は、以下のとおりである。</p> <p>1 授業内の思考だけで子供の考えを捉えないで、毎日の学校生活の中で子供との関わりを問い続けながら、子供の理解を深めていくことが大切であること</p> <p>2 身近な事象に関心や疑問がもてる子供の育成を目指すこと</p>

	<p>3 子供に「分かってもらえている・自分のことを気にかけてくれている」といったことを感じさせ、子供が教師との間に「安心感」がもてるような信頼関係を構築すること</p> <p>4 教員自身が社会的な事象全般について常に想像をすること</p> <p>5 学習課題は、程よい深刻さ（切実さ）であること（子供の思考を元にして創られるものが望ましい）</p> <p>6 「自ら問いがもてる子供」の育成や「日常的な気付きや興味の喚起ができる子供」を育成すること</p> <p>7 社会科の教材として（教員が）与えるものを仮のものとし、自ら問いがもてる子供が、「現在の自分を中心とした身近な環境の中」から見いだした教材こそが真に子供の追究を喚起するもの、との意識を教員がもつこと これらを「小学校社会科の筋道」として、学校での実践の中で検証し、「理論と実践」の融合を目指していく。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>研究のために実践するのではなく、実践や子供の姿からにじみ出てきた結果から、その内容を照らし合わせて検証し、「自律的な学びができる子供を育む」かわりに関する「実践の伴った、学校発の」更なる論文の作成を目指すことであるとの認識をもった。</p> <p>このようなことに関して高久は、「家庭学習の時間を質問紙法で調査した結果を円グラフで示した（略）ひどく気にかかりはじめたことがあった。それは、この調査結果がわがクラスの『家庭学習の実態』として、なにか動かすことのできない厳然とした事実であるかのように思いこまれ、取り扱われていることである」という、ある小学校教員のエピソードを挙げている。そしてこのことは、「一側面に限り、しかもたえず動いているものをある時点で切ってとらえたものである」と指摘している。そして、教員は「子供の動きと、これにはたらきかける教員の動きとをいつも結びつけてみていくところに、『実態』ととらえることのキーポイントがある。」と結論付けている。授業における子供の「動きそのものを捉える」ことが教員の（学校の）最大の研究なのである。</p> <p>目の前にいる、子供たちの動的な全ての教育的事象に対する「洞察」こそ、学校での「教員の研究力」の大きな鍵を握る、との捉えが重要であるとの結論に至った。</p>